

(前号からの続き)

咽喉 二十四

食物及び呼吸のいかどうなれば、出入運び、通ジ、せき止め、くわせをしみ、人ののどを」(6ウ)
しめる如く、心遣等の理を現す。

脊 二十五

脊は後にして、主として過ぎ去りたる事の理。陰のり。せき任、ひかへ心、尻込心、親及び子の扶養に関するり。後めだるき心遣ヒ理とさとする。

腰 二十六

腰強き、又腰なきり。又人の腰押し。人の腰折る。腰すわらん。腰かけ心等及ヒ色情のり。

身体の左と右のり 二十七

身体はすへて左半分は親、若しくは神のり。善のり。先々のり及び」(7オ)
女二有りては男のりにして、右半分は身下のり。悪のり。過去のり。男に有りては女のりとするべし。

身上と時刻のり 二十八

身上とときによりて、其りを異にする事あるべし。時は月日のめぐりによりて、移る物にして、夜は月様なれば男のりいと知るべし。

ひるは日様なれば、女のりと知るべし。されば子供が夜間に死す時は、父親のりいと知るべし。ひる死去は母親のりと知るべし。発病の時に於けるも同じ事なりと知るべし。」(7ウ)

十二指腸虫病ノり 二十九

此病気は腸の内に小さき虫の生じて、血の吸ひとる病気なり。御道より見る時は、物事の仕方、取り捨てに粕の心遣、誠迄も無にする心遣ヒ、きたなき欲、出しをしみのりにして、貧血は誠の不足、づつうは我の心強きり。勝手、慈悲の不足。身欲とり込のり。

百日せき 三十

本病は突然、深気吸こみをなし。続いて甚々しき咳をなす。始め出すいきのつきるに及び、食物を吐きて止むを以て、御道よりは」(8オ)

親の吹きわけ、物言い、あたりまいならざる故に、折角の誠迄も粕にする心遣をしめされ、其元は、かせ引、我と気すい一種の病のどくが本病に兎の呼吸する空気二より、伝染する物なれば、親子同体の理を現わされ、気管枝かたる、慈悲の不足、言葉の荒きり。食物を胃にもたざるは、受たる誠さい身につかず、をさまらす、をさめず事のできぬり。をとるへ、慈悲、誠の不足。けいれん、せいのせき、つゝはり心をもつて、物事にすれる心遣のり。」(8ウ)

井戸水のにごり 三十一

くじ口論、男女もつれ、間男間女のもつれなどあり。或は又其一家に大いなるにごりのり。一家のくづれのり。天の誠にはなるゝり等であるを示されたるものして、大いなる神の残念と知るべし。

御授の時たごる理 三十二

いまだ心をさまらざるのみならず、甚々しき誤解、もしくは疑ひ心あるか、不足心或は理を突返す心あるものと知るべし。

盗難に逢ふ理 三十三

因縁のりもあり、すべて人の目をくらし、世界をくまし、或は又、人の目をつぶし」(9オ)

女房をぬすび、身欲を使ふたり、あたゑなきものを取込たるり

の返しと知るべし。悪銭身につかず。くらまして取込たるもの。焼るか流れるか、盗まるゝが、いづれにしても、失ふが天理なり。特に盗まるゝは、盗み心強くして取込たるりとさとるべし。

建家の倒れるのり 三十四

容易ならざる天の残念の現れにして、人の怨の金、大いなる欲の埃の金にして、建たる理にして、先々家のしんめ柱、主人のこける倒れるきざしを現」(9ウ)

わされし、其他立べき所を立す、他を倒したるが如し理とさとるべし。

種物をねすみの食うり 三十五

種は、ものたねなり。つゞきなり、元なり、親なり。くわるゝわ、切るなり。消ゆるなり。故に親子親族身より不和合あり。夫婦の心切るなり。親を切る心遣ヒ。元をむにする心遣ヒ。つゞきめを切る心遣ヒ等にて思案すべし。

ねずみあばれるり 三十六

内々納まらぬりなり。又内々若くはめいへ内心に事情をふくむり。或は内々にえよふ」(10オ)

のすぐるりも有。一家中つゞしめは、ねずみもつゞしむ。衣服にえよふをすれば、ねずみくいやふるものとするべし。

或ハ又、間男間女のりいによりて、ねずみさわぐ事もあり。又沢山居りしねずみが居らぬよふになりたも、内々にさかさ事、災難等の来る前しらせとさとるなり。

作物へ虫のつく理 三十七

一家族に主人の心の理。一言にて云へば、強ききたなき欲の心遣なり。人の心やますりの返りにして、例糸は小作米の払込にしても、先方糸は、虫のわくよふな不始末な、悪い」(10ウ)
米を納め、我方糸は善米を残すか如く、売米二わ水を吹いて、売か如し。すべて主人の心に虫をわかしたる如く、きたなき心遣ヒと知るべし。従て人の道をわきまへず、我欲一へんの心。我が田へ水引くの心。慈悲のなき心遣ヒのり有るを思案すべし。

牛馬の病 三十八

此又一家、特に主人の心遣現われなり。而して其症状によりて、主人の心に、欲の心強きり。通じかよいのなき無慈悲の心。金銭縁談つなぎのせき止のり。など等思案すべく、其他すべて人間の身」(11オ)

上のりに引あてゝ思案すべし。

まゝ子になる理 三十九

前生持越の理なり。即ち前生二於て、妻のある人を横取にしたる色情の大なる因縁によりて、我に子なく、とこまでも後妻に行きて、まゝ子のせわをすべきなり。されは、因縁より、我むねを痛めつめて、今日と云う日がなきが当然なり。まゝ子を真の産の子よりも大事にし、情を作りて育ていつくしみて、初めて因縁を切る第一歩に入者を思案し、低きやさしき慈悲ある」(11ウ)

心になり、通るべし。

毒虫に食はるゝり 四十

まむしと云はす、百足と云はす、すへて毒有者に食はるゝは、すべて物事に、大いなる不足心、其不足心より怨ねたみを生じ、人の心を損い、人に害をなすりのかへりなり。心遣より云へば、我強く、がまんかんじやくにして、人をのろ心あり。我心にかなわぬ為にわ、心を鬼にして、人のくるしみは何とも思はぬり。もやす心、毒づく心の理を思案すべし。

あと、偏頭痛、よふ、丹毒、と続くが省略する。